

選手と入院児つなぐ振動

ブルズと岩手医大モバイルハイタッチ実証実験

遠隔地をインターネットでつなぎ、映像と音声に加えて振動をリアルタイムで伝える技術「モバイルハイタッチ」の実証実験が、バスケットボール男子Bリーグ3部B3の岩手ブルズのホーム最終戦で行われた。全国初の試みで、選手と岩手医大付属病院に長期入院中の子どもたちが画面越しに触れ合い、ドリブルが床に響く感覚など会場にいるような臨場感を味わった。NNTが技術を提供したもので、医療や教育を幅広い分野への応用が期待される。

【関連記事11面】

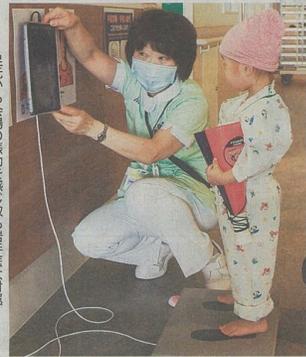


入院中の子どもたちにハイタッチの振動を伝える千葉出選手（左）と触覚キャスターの幅下天悟さん（右）。盛岡タカヤアリーナ

画面越し、臨場感楽しむ 医療や教育に期待

盛岡市本宮の盛岡タカヤアリーナで、試合前のブルズの選手がタブレット端末に取り付けられたタブレットハイタッチする。画面の向こうで振動を受け取るのは小児病棟に入院中外出できない0〜12歳の子どもとその家族だ。今季で引退する千葉出選手は、振動聞いている？、みんな一緒に頑張ると笑顔を見て、ドリブルを披露。子どもたちはボールが床をたたく振動などを手記から感じ取った。シュート練習や選手入場時のハイタッチも発信。病院関係者によると、子どもたちは笑顔で楽しんでいった。

モバイルハイタッチは、会場にいる発信者がタブレットに取り付けたマイクで音声や振動を送り、受け手は振動「触覚キャスター」を届けた。



足元から会場の振動を感じ取る岩手医大付属病院に入院中の子ども（左）と触覚キャスター



モバイルハイタッチは、会場にいる発信者がタブレットに取り付けたマイクで音声や振動を送り、受け手は振動「触覚キャスター」を届けた。発信側のタブレットを届けた「触覚キャスター」を届けた。実証実験は、NNT東上岩手支店（盛岡千夏支店）が技術を提供。遠隔医療で連携してきた同病棟で、ブルズの3者などで計画を進めてきた。

今回のスポーツで活用されたモバイルハイタッチだが、応用分野は広い。新型コロナウイルス感染症の感染で病院の面会が禁止される中、患者と家族の触れ合いにも役立つ。遠隔教育にも実技指導の質を高めたり、視覚障害者とのコミュニケーションの手段としても期待される。技術開発に携わったNNTコミュニケーション、科学基礎研究所の駒橋・リサチスベシヤリストは、この技術でつながっている感覚を得ることができる。今回は一方からの発信だったが、双方のやりとりの質を高めることが今後の課題だと普及を見据えた。

画面越しにハイタッチ

ブルズと難病の子

難病で入院中の子どもたちが、タブレット端末を通じて、試合前のプロバスケットボール選手とハイタッチ―。子どもたちを元気づける、そんな試みが24日、Bリーグ3部・岩手ビッグブルズの試合会場と岩手医大付属病院をつないで行われた。

振動、音端末で伝える

試みは、離れた場所の振動や音声を通信端末で伝えるNTT東日本の技術の実証実験の一環。同社がビ

この日の実験では、スマートフォンに取り付けたアクリル板に伝わる振動や音声の情報を、受信側のタブレット端末に送信する装置を使用。盛岡タカヤアリーナ(盛岡市)で試合を控えた選手らがスマホに向かってドリブルしたり、ハイタッチしたりして、同大付属病院(矢巾町)に長期入院する0〜12歳の子ども7人にボールの振動

やハイタッチの感覚を伝えた。

選手らと画面でハイタッチした子どもたちは「楽しかった」と喜んでいった。子どもたちの担当医師は「みんな笑顔だった。同じような体験を他の子どもたちにもさせてあげたい」と話していた。

NTT東日本は今後、同技術を活用して医療分野や教育分野で新たなサービスをを行う方針。同社の担当者は「コロナ禍で人と会えない中、新しいコミュニケーションツールとして活用できれば」と話した。



通信端末を通じて入院中の子どもとハイタッチする岩手ビッグブルズの選手(24日、盛岡市の盛岡タカヤアリーナで)



タブレット端末を通じて選手と交流する入院中の子ども=岩手医大提供

開票結果

定数22―候補23

(年齢は投票日現在。
丸数字は当選回数)

- 当 2,087 竹花 邦彦 70 立現⑤
- 当 2,006 小島 直也 64 公現③
- 当 1,389 松本 尚美 65 無現⑦

入院中の子と熱気共有



モバイルハイタッチのデバイスを使い、試合前の様子を届ける幅下選手(左)

モバイル
ハイタッチ

音声や振動を届ける

ビッグブルズ
ホーム最終戦で 会場と病院をつなぎ

東日本電信電話若手支店(盛岡市中央通、片岡千夏支店長)などは24日、盛岡タカヤアリーナ(盛岡市本宮)で行われた若手ビッグブルズの今シーズンホーム最終戦で、会場内の音声や振動を離れた場所と感じられるシステム「モバイルハイタッチ」を、全国で初めて実施した。若手医大附属病院で入院治療中の子どもたちと会場をつなぎ、試合の熱気と元気を届けた。

このシステムは専用 タッチの感触を送信。のデバイスを通して、タブレットなどを通して、会場の音声を映像、床でそれらを受信する。の振動、選手とのハイタッチで、会場外でも試合

の雰囲気リアルタイムを体験。患者やその家族が感じ取ることが、族からは楽しかった。子どもたちも素晴らしい企画だった。長期療養を必要とする子どもとスポーツを素晴らしい企画だった。チームのマッチング事業」と感想が寄せられた。などを行う、NPO法

人「Being AL 幅下選手は「モバイルIVE Japan」ルハイタッチと今回の(東京都世田谷区、北 試合を通して、患者さん野華子理事長)が運営 なたに勇気を与えらする「TEAMMATES」の支援を受。このシステムを使けて入団している、幅下 病院内ではできない。天悟選手(18)がデバイスを持ち、ドリブルの音や選手とのハイタッチの感触を送信した。今後は、医療・教育分野においても振動伝送を活用したサービスを展開する見通し。12歳の男女7人が振動